

# 英吉利古典翻譯文學の ハイパー・マルチメディア・テキスト化

松岡 光治

## 1. 舊字舊假名を未來社會に残す

戦前戦後の日本の若者にとって必讀書の一つであつた『ヘンリー・ライクロフトの私記』( *The Private Papers of Henry Ryecroft*, 1903 ) の中で、著者ギッシング ( George Gissing, 1857-1903 ) は「自分が英吉利に生まれた事を嬉しく思ふ多くの理由の中で第一に數ふ可きは、自分が自國の言葉で沙翁<sup>シェイクスピア</sup>を讀める事である。(中略)骨の折れる學習を通じて生きた魂にやつと觸れる事が出来る外國訛りで、沙翁が語るのを聞くに過ぎない立場に自分が居ると想像したら、忽ちぞつとするやうな落膽と、侘びしひ喪失の感に襲はれる」と、<sup>1</sup> 語り手に胸中を披瀝させてゐる。

現代の一般的な日本人にとって、『ヘンリー・ライクロフトの私記』とジャンルが同じ『方丈記』( 1212? ) や『徒然草』( 1331? ) と云つた中世の文學は言ふもがな、中世以來の定家假名遣ひの誤りを指摘して歴史的假名遣ひを確定した国学者・歌人の契沖 ( 1640-1701 ) や浮世草子作者の井原西鶴 ( 1642-93 ) が活躍した近世の文學のみならず、鷗外や漱石と云つた明治の近代文學さへも、其の原文は「外國訛り」のやうなものとなつてゐる。

明治以降に國家に依つて統一的行はれた國民教育の一手段であつた 言文一致運動 が、例へば二葉亭四迷の『浮雲』( 1887-89 ) のやうな文藝作品を通じて、近代へ人間解放の大きな原動力となつた事は否定出来ないが、其の當然の歸結として文語文の衰頹を招いて仕舞つた。更に、第二の言文一致運動とも言へる敗戦後の國字改革に依る現代假名遣ひの導入と漢字の簡略化や使用制限は、日本人にとっての古典を完全に「外國訛り」のやうな存在にして仕舞つた感がある。現在、近世以前の古典や近代以降の ( 特に戦前までの ) 作品を學校の國語で學習する際には、前者は新字舊假名で、後者は新字

新假名に改められたものを使ふ。これは一般の市場に流布してある文庫本の文字遣ひに就いても當て嵌まる。例へば新潮文庫では、日本文學の文字表記に關して、成る可く原文を尊重すると云ふ見地に立ち乍らも、口語文は現代假名遣ひに改めた旨が卷末に記されてある。<sup>2</sup>

昨今の英吉利人が 1903 年出版のギッシングの辭世の書『ヘンリー・ライク口フトの私記』を讀むのに苦勞するとは考へられないが、彼と同じ 1903 年に没した尾崎紅葉(1867 年 1 月 10 日生まれ)の辭世の書『金色夜叉』を現代の日本人が讀むには相當の苦勞が伴ふ筈である。ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の人口に膾炙した『クリスマス・キャロル』(A Christmas Carol, 1843)の主人公スクルージ(Scrooge)が拜金主義から戀人に逃げられて守錢奴になつたのとは對蹠的に、『金色夜叉』の間貫一は富山唯繼の富マモンに目が眩んだ許嫁の鳴澤宮に捨てられた事で守錢奴となる。『クリスマス・キャロル』は饗庭篁村あえばこうそんに依つて最初に翻譯され、『影法師』と云ふ邦題で明治 21(1888)年 9 月 7 日から一箇月間『讀賣新聞』に聯載された。此の翻譯を當時二十一歳であつた紅葉が讀んでゐて、『金色夜叉』執筆に何らかの影響を受けた可能性は、雙方のテーマの類似性を考へると、極めて高いと言はざるを得ない。次の引用文の前半は原典の前編第 2 章の書き出しで、富山唯繼(富の山をたゞ受け繼いだ男)のダイヤモンドの指輪に鳴澤宮が魅せられる箕輪家の骨牌會を描寫した名にし負ふ場面、後半は現在の高校の圖書館等に藏されてある森敦譯の當該箇所である。

箕輪の奥は十疊の客間と八疊の中の間とを打抜きて、廣間の十個處に眞鍮の燭臺を据ゑ、五十目掛の蠟燭は沖の漁火の如く燃えたるに、間毎の天井に白銅鍍の空氣ランプを點したれば、四邊は眞晝より明に、人顔も眩きまでに耀き遍れり。三十人に餘ぬる若き男女は二分に輪作りて、今を盛と歌留多遊を爲るなりけり。蠟燭の焰と炭火の熱と多人數の熱蒸と混じたる一種の溫氣は殆ど凝りて動かざる一間の内を、莨の煙と燈火の油煙とは更に纏れて渦卷きつゝ立迷へり。

箕輪みのわ家の奥は十疊の客間と八疊の中の間とを打ち抜いて、広間の十か所に眞鍮しんちゆうの燭台しよくだいを据ゑ、大ローソクがともされ、間ごとの天井にはニッケルめっきの空氣ランプが輝き、あたりは眞晝よりも明るかった。あたかも、三十人あまりの若い男女が、ふた手に分かれて輪をつくり、カルタ遊びの眞っ最中である。大ローソクの焰ほのおと、炭火の熱と、ひといぎれでむっとするなかに、煙草たばこの煙と燈火の油煙が立ち迷っていた。<sup>3</sup>

變體假名（花札の睦月松にある「あゝよろし」の「ゝ」等）は、明治政府が1900年の「小學校令施行規則」で現在のやうな一音一字の平假名を制定する事で、切り捨てられて仕舞つた。さうした變體假名を用ゐた江戸時代の文語體であれば、其れは英吉利人が英詩の父と稱せられるチョーサー（Geoffrey Chaucer, c.1343-1400）を読むやうに限りなく「外國訛り」に近いだらう。然らば、近代文學に於ける紅葉の『金色夜叉』や漱石の小説のやうな舊字舊假名の口語體は、現代の一般的な讀者にとつては、さしづめ英吉利人が沙翁を読むやうなものである。

併し乍ら、文庫本等で新字新假名に改められた漱石の小説ですら、現在の中等學校の國語の授業では讀めなくなつてゐる。難解で讀めないのではない。「ゆとり教育」を標榜する文部科學省に依つて平成14（2002）年に戦後7度目の改訂が爲された學習指導要領の影響を受けて讀めないのである。詰まり、國語の授業時間が史上最低となり、或る意味で日本人の思想の根基を養つてゐた漱石の小説が殆どの教科書から姿を消して仕舞つたのだ。ゆとり教育の主旨は表面的には「自ら學び自ら考へる力の育成」にあるが、實際には内容を減らして（餘分な箇所を削つて）効率よく學ばせる事にあるやうに思へてならない。1946年に内閣告示された現代假名遣ひや1949年に公布された當用漢字々體も又、英語のやうに少ない文字數で國語を書けば、教育も進んで戦後の復興に役立つのだと云ふ幻想の下に始まつたのである。明治以降の日本の英語教育は英語を用ゐて古典的教養を與へて來たが、逆に日本語の方は効率性を重視して簡素化された言語の統一を目指して來た。經濟復興の足枷となると考へられた複雑な日本語表記に對して、有用性と効率性ばかりを唱へた戦後の性急な日本語教育も同斷である。其れは傳統的な文化遺産を打ち壊すだけで成功する公算もない愚學であり、高度成長期の企業間競争を支へた實用性至上主義が結果的に環境を破壊した事と軌を一にしてゐる。<sup>3</sup>

斯様な言語の簡素化や平明化は世の中を實用主義的な觀點から捉へる見方と完全に一致する。實用性と効率性だけを求めて事實と數字のみに頼り、想像力を養ふ裝飾的なもの（餘分な箇所）を削り取らうとする現代日本の教育は、ディケンズの頃と何ら變はつてゐない。<sup>4</sup> 其れは、想像力が育まれる非實用的な時間を取り上げ、學外での實用的な學習に傾斜配分しようとしてゐるとしか思へない。ゆとり教育の主旨は、子供が焦躁感に驅られる詰め込み教育ではなく、羽を伸ばした環境で基礎學力を養はせる事であつた筈だが、實際には學習塾や豫備校に通ふ子供と通はない子供の學力差を生み出すだけでなく、公立學校と私立學校との格差迄も大きくしてゐる。かうして、日本社會のヒエラルキーを推し進めると云ふ惡循環に陥つてゐる譯だが、其の事は當然乍ら或る種の人々

に依つて豫想（或いは期待）されてゐた筈である。

此の輕學妄動に政府も漸く氣付いたやうで、文部科學大臣は 2005 年 2 月、現行の學習指導要領に就いて授業時間數の見直し等を検討するやうに要請し、2005 年の秋迄に基本的な方向性を報告するやうに求めた。眞のゆとり教育とは、基礎學力の養成と同時に、量よりも質に重きを置いた教育、換言すれば獨得の面白い發想を生み出す時間的な餘裕だけでなく、日常生活の満足感や充足感、自己と他者に對する慈しみの心を持たせるやうな精神的な餘裕を與へる教育の事である。藝術に觸れて受ける感動は其の最たるものであるが、國語の授業に當て嵌めるならば、其れは文學作品の鑑賞と云ふ事になる。ゆとり教育の見直しに向けた制度改正に依つて生まれる筈の國語の學習時間の増加が、昔のやうに現代文學のみならず舊字舊假名を使つた古典の學習にも注がれれば、人類の叡智に満ちた先達の哲學を學ぶ事で豊かな心を育む事が出来るだらう。

舊字舊假名の消失に依る最大の弊害は、古典と現代の日本語との聯結を斷つて仕舞ひ、日本の歴史を通じて受け繼がれて來た傳統文化を壊滅させた事である。漱石文學は原典の舊字舊假名で讀まない、矢張り明治と大正初期の純然たる雰圍氣は味はへない。同じやうに、例へば『クリスマス・キャロル』が書かれた英吉利ヴィクトリア朝の初期に於ける時代精神や社會風潮は、英語の原典を讀まない、體感出來ない。翻譯を利用する場合には、出来るだけ書かれた當時に近い時代の翻譯を讀む方が、其の假想現實ヴァーチャル・リアリティも高くなる筈である。其れは、平安中期の『源氏物語』の時代的・社會的な雰圍氣を現代語譯で味はふには、田邊聖子譯や瀬戸内寂聽譯よりも谷崎潤一郎譯や與謝野晶子譯の方が良いのと同斷である。

併し、此の期に及んで日本の現代社會に舊字舊假名を復活させるのは無理であるし、未來社會に於いても不可能である。然らば、何らかの形で舊字舊假名の作品を少しでも多く、現在の科學技術テクノロジーを用ゐて復活させ、未來社會に残す可きではあるまいか。其處で筆者は、漱石門下の森田草平（1881-1949）が 76 年前の昭和 4（1929）年に舊字舊假名の口語體で翻譯し、岩波文庫の一冊として出版したディツケンス作『クリスマス・キャロル』を其の儘の形で電子化し、インターネットの最新技術を使ふ事で、ハイパー・マルチメディア・テキストに加工した。以下、此のハイパー・マルチメディア・テキストが未來社會に於いて従來とは違つた、如何なる讀書行爲を齎すかに就いて考察してみたい。



森田草平

## 2. 英吉利古典翻譯文學の電子化

今回、舊字舊假名の英吉利古典翻譯文學を電子化する際に、其の對象の基準としたのは、版權の切れた作品で翻譯された回数が出来るだけ多い名作であつた。海外の文學の翻譯作品で此の基準に最も合致するのはディケンズの『クリスマス・キャロル』である。此の小説を『影法師』と云ふ邦題で最初に翻譯した饗庭篁村は、其の2年前に『當世商人氣質』を聯載して作家としてデビューし、坪内逍遙ととも「明治20年前後の二文星」と幸田露伴から呼ばれた。其の『影法師』以來、『クリスマス・キャロル』は少なくとも58人に依つて、延べ69回以上も翻譯された日本の翻譯史上稀有な作品である。海外の文學作品で此れ程數多く翻譯されたものはないだらう。

ハイパー・マルチメディア・テキスト

### ディッケンズ作『クリスマス・カール』

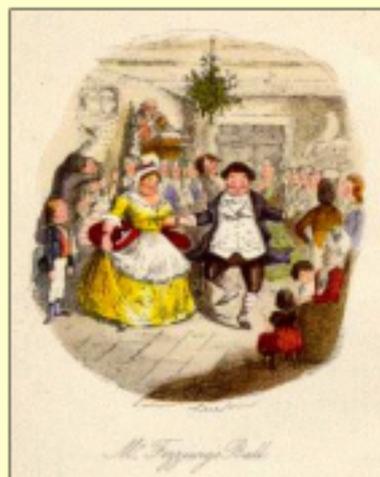
森田草平譯（岩波文庫 496、岩波書店、昭和四年四月二十日發行）

「神よ陽気に衆方を憩わせたまえ」 <"God Rest You Merry, Gentlemen">



#### 目次

- はしがき
- [第一章](#) マアレイの亡霊
- [第二章](#) 第一の亡霊
- [第三章](#) 第二の亡霊
- [第四章](#) 第三の亡霊
- [第五章](#) 大團圓
- [譯者紹介](#)
- [挿絵画家紹介](#)



挿絵：ジョン・リーチ

今回のハイパー・マルチメディア・テキスト化として選んだのは森田草平譯の『クリスマス・カロール』であるが、其の理由は(1) 舊字舊假名の口語體で譯されてゐる事、(2) 譯者が東京帝國大學英文科卒で、漱石門下の小説家としては鈴木三重吉と雙璧をなし、イプセン、ドストエフスキー、ゴッソー、ゲーテ、セルバンテス、ボッカチオ等の作品の翻譯を手掛けた第一級の學者である事、(3) 定評のある岩波文庫に初めて收められたディケンズの作品である事、(4) 森田草平が昭和 24 (1949) 年 12 月 14 日に歿してから 50 年以上が経過し、翻譯の著作権が消滅しているので、電子化して自由に加工出来る事であつた。試作品はウェブ上で公開してゐる。

<<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/dickens/carol/carol-morita-0.html>>

### 3 . ハイパーテキストと現代批評理論

ハイパーテキスト研究の第一人者でブラウン大學の英文學・美術史學教授のジョージ・P・ランドウ (George P. Landow) は、『ハイパーテキスト - 現代批評理論とテクノロジーの収斂』(1992) の中で、「J・デイヴィッド・ボルター (J. David Bolter) が『ライティング・スペース』(1990) に於いて「ハイパーテキスト性が開かれたテキストと云ふポスト構造主義的諸概念を具現してゐる」<sup>6</sup> と指摘したのを受け、「批評理論は必ずハイパーテキストを理論化して呉れるものであり、ハイパーテキストは理論の諸相、就中テキスト性やナラティブ、讀者や作家の役割や機能に關係する諸相を必ず具體的なものにして實驗して呉れる」<sup>7</sup> と斷言した。此の場合のハイパーテキストとは、活字だけの單なる電子テキストではなく、多くの脚注 / 尾注が施された學術論文のやうに、同一ファイル内にリンクが張られた註釋にジャンプ出来るやうな、或いはリンクが張られた外部のウェブサイトにもジャンプ出来るやうな、インターネット上で閲覧可能な電子テキストを指してゐる。

現代批評理論の中で、リンク、ウェブ、ネットワーク、多線性と云つた開かれて終はりのないハイパーテキスト性を最も面白い形で具現してゐるのは、デリダが 1966 年の「人文科學の言語表現に於ける構造と記號とゲーム」(『エクリチュールと差異』下巻所収、若桑毅譯、法政大學出版局、1983) で鮮明にした「脱中心化」と、バルトが 1970 年に『S / Z - バルザック「サラジヌ」の構造分析』(澤崎浩平譯、みすゞ書房、1973) で提唱した「讀み得るテキスト」(*texte lisible*) と「書き得るテキスト」(*texte scriptable*) と云ふ二種類の概念だらう。

従來の活字テキストに於いて讀むと云ふ行爲は主として直線的であつた(尤も、直線的な讀みを中斷して註釋等を参照する事はあつたものゝ、普通は再び

當該箇所に戻つて直線的な読みを再開する)が、ハイパーテキストでは張られた(ハイパー)リンクをクリックする事で読む行為の中心がずれると同時に、脱線した自分が中心となつてリンク先で更なるリンクのクリックを断続的に行なふ。さうする事で、自分が能動的な読者として絶えず新しい読みの軸を形成して行く事になる。斯様な読みの行為は、最初に読んでみた原テキストを新しい読みの別の軸(最初の軸から見れば周縁に過ぎない所にある別の軸)と云ふ視点で見る事に繋がり、次節で述べる「脱中心化」の具体例で分かるやうに、原テキストの中心軸にある(作者が設定した)主題の矛盾点等が目に留まり易くなる。

読者の経験や想像力に訴へて様々な解釈を生産させる点で、文学作品のやうな活字テキストが暗示的であるのに對し、註釋の多い學術論文に或る意味で似てゐるハイパーテキストは、リンクを張り巡らす事で読者に傳記的、歴史的、社會的背景や其の他の關聯情報を與へると云ふ点で明示的だと言へる。但し、ハイパーテキストは明示的とは言へ、直線的な読みを誘導する活字テキストと違ひ、テキストの中心軸から周縁の世界へ自由に入出入り出来る無数の扉を持つ開かれた構築物であり、読者の能動性に依據した非直線的・離散的な読みを誘動する。

織物(text, textile, texture)としての重層性をコードの觀點から分析し乍ら作品の解體を試みたバルトに依れば、プロットの流れに従つて成長して改心するとは言へ、フラット・キャラクターとして守銭奴の代名詞となつてゐるスクルージを主人公に擁する『クリスマス・キャロル』は、傳統的な寫實主義リアリズムの(但し、此の作品は心理的リアリズムのみならず御伽話的ファンタジーの要素もある)小説として、読者が受け身で反應する「読み得るテキスト」のやうに定義されるかも知れない。併し、ハイパーテキスト化される事に依つて、此れも次節で詳述するやうに、読者は自らが意味を求めて積極的に読みの行為に参加する事で、従來の單なるテキストの消費者から新たなテキストの生産者へ變はる事が出来るのである。

#### 4. 増殖する織物としてのハイパー・マルチメディア・テキスト

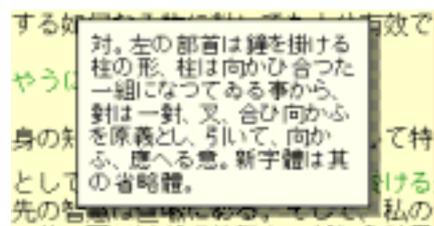
以下、森田草平が舊字舊假名の口語體で譯したディツケンズ作『クリスマス・カロル』を用ゐて、筆者が試作したハイパー・マルチメディア・テキストの特徴を具體的に説明してみよう。

蜘蛛の巣 - 形狀的には マスクメロン と言つた方が良い - の網目のやうに地球を覆つてゐるインターネットのウェブは、宇宙のやうにマクロに擴大してゐるのではなく、其の網目が急速に密になつてミクロに増殖してゐるタペ

ストーリー（織物）に譬へる事が出来よう。今回試作したハイパー・マルチメディア・テキストも、さうした全地球的なウェブの縮圖（マイクロコスモス）である。斯様なウェブの世界に開かれたハイパーテキストの最大の特徴は、上述したやうに非直線的・多線的な読みを誘導する事であるが、読んであるテキストの中心軸から逸れてウェブの世界に飛び出したとしても、ルービック・キューブと同じで出発点の中心軸へ戻つて来る事は理論的に可能な筈である。併し実際には、一度出て行けば鐵砲玉のやうに帰つて来ない可能性が高い。従つて、今回のハイパーテキストに張り巡らせたリンクに関しては、テキスト内部のリンクは オンマウス表示 か ポップアップ表示 が爲されるやうに、テキスト外部へのリンクは新しいブラウザ画面が開くやうに、URL の設定（target=“\_blank”）を施した。此れに依つてスクリーン上には常にハイパーテキストのブラウザ画面が残るので、非直線的・多線的な読みを選択した読者は容易に中心軸に戻る事が出来る。

#### A . JavaScript に依るテキスト・ポップアップ表示

點畫を略さない舊字は正字（本字、康熙字典書體）と言はれ、さうした漢字には一語一語に物語性や文學性がある。舊字が新字になつた戦後、其の物語性や文學性が薄れて仕舞つたが、此のハイパーテキストでは舊字の持つ物語性や文學性に注目させてある。例へば、第一章「マアレイの亡霊」の劈頭の第一節に、「彼の署名しようとする如何なるものに對しても十分有效であつた」と云ふ表現があるが、「對」に黒字の儘で下線を施し、右圖のやうにポップアップ表示を設け、「对。左の部首は鐘を掛ける柱の形、柱は向かひ合つた一組になつてある事から、對は一對、又、合ひ向かふを原義とし、引いて、向かふ、應へる意。新字體は其の省略體」と云ふ解字を付した。



漢字の六書（象形、指事、會意、形聲、假借、轉注）は漢字の成り立ちを示すものであり、漢字を作る基礎となつてある。物の形を其の儘かたどつた繪畫的な象形文字だけでなく、「對」のやうに意味を表はす文字と音を表はす文字を組み合はせた（漢字の8割以上を占める）形聲文字に就いて、其の理解を正字を通じて定着させる事には價值がある。東亞細亞は日本の未來社會にとつて今以上に重要となる筈だから、正字體の習得は其れが用ゐられてゐる臺灣や香港等に於いて、書き言葉に依る最低限のコミュニケーションに役立つと云ふ點でも意義がある。

## B . JavaScript に依るウィンドウ・ポップアップ表示

次はテキストだけでなく画像も入った大き目のウィンドウが開く表示で、例としてはスクルージが聖降誕祭の挨拶を聯發する甥のフレッド (Fred) に、「聖降誕祭お目出たうなどゝ云つて廻つてゐる鈍兒どもは何奴も此奴も其奴の

プディングの中へ一緒に煮込んで、心臓に<sup>ひらぎ</sup> 柊の棒を突き通して、地面に埋めてやるんだよ。是非さうしてやるとも！」と毒舌を振るふ場面を擧げる。天邊に柊の枝を挿す伝統的な聖降誕祭のプディングは、画像ファイルが読者のイメージを固定化する。スクルージは恐



ろしい事態を茶化して、不氣味なユーモア (gallows humor) に溢れる悪態を吐くが、其處に付された註釋 - 犯罪者や自<sup>縊</sup>の心臓に杭を打ち込んで、人が踏み付けるやうにと十字路脇に埋めたと云ふ前近代的な懲罰 - に関しては、當時の讀者であれば活字テキストに於ける作者の暗示を理解出来たゞらう。併し、當時の慣習を知らない現代の讀者に對しては、ハイパーテキストのウィンドウ・ポップアップ表示に依つて斯様に明示する必用がある。因みに、間抜けな人を意味する「どぢ」に對して譯者が使つた「鈍兒」は、漢字本來の意味に關係なく、其の音、訓だけを借りて表記した當て字であり、小説家でもあつた森田草平の創造的な想像力を雄辯に語る一例だと言へる。

## C . JavaScript に依るオンマウス表示

ハイパーテキスト版『クリスマス・カロール』では、讀みの最小單位 (レクシ) として斷片化したものゝ中で、問題提起出来さうな比較的重要な箇所に、出来るだけ註釋を施した。其の註釋は數量的に多いので、緑色のリンク文字にポインタを合はせるだけで、リンク先の説明が其の場でポップアップ表示されるやうにした。これはクリックの手間を省くだけでなく、新たに餘計なブラウザ画面を開く事もないので、作品のプロットの軸に沿つて讀者に直線的な讀みを持続させながら、より深い理解の爲に註釋と云ふ形で關聯情報を提供出来る。例へば、作品冒頭の有名な「老マアレイは戸の鉾のやうに死に果てゝゐた」と云ふ緑色の一文にマウスのポインタを當てると、下圖のやうなウィンドウが表

示される。ポップアップされた水色の小窓には、日本語訳の部分の原文 (“Old

Marley was as dead as a door-nail.”) が示され、「死んだ」の直喩 (simile) としては伝統的に「鱈」(herring) や「羊肉」(mutton) が使われるが、ディケンズは頭韻 (alliteration) を踏ませる爲に、「扉の釘」(door-nail) を用ゐたと解説されてゐる。此の表現に依つて、ディケンズが直後に「寧ろ棺の鉞を取引に於ける最も死に果てた<sup>かなもの</sup>鐵物と見做したい」と述べた時に、“dead” には「死に果てた」の他に「活氣のない、賣れない」の意味が込められてゐる事を讀者は察知し易くなる。

#### D . 間テキスト性 - マルサスの『人口論』と「過剰な人口」

事務所にボランティアの紳士達が現はれ、スクルージは聖降誕祭の時期に恵まれない者達が基督教徒らしい心身の慰安を感じられるやうに寄付を要請されるが、斯様な人間に就いて「いつそ死んだ方がよけりや・・・さうした方が可ゐ、そして、過剰の人口を減らす方が可う御座んすよ」と答へる。「過剰の人口」(surplus population) と云ふ不穩な言辭で當時の讀者がマルサス (Thomas R. Malthus, 1766-1834) の『人口論』(An Essay on the Principle of Population, 1798) を聯想したか否かは定かでないが、次のやうなポップアップ表示に依つて、現代の讀者は間テキスト性を實感出来る筈である。産業革命は多くの失業者や貧窮者を生み出したが、此の現状に對してマルサスは、人口は幾何級數的に増加するのに食料は算術級數的にしか増加しないのだから、貧困者の續出は自然的結果であり、救貧制度等は人口増加を助長し、卻つて害があると云ふ悲觀的結論を導いた。「過剰の人口」と云ふスクルージの言葉は、マルサスが『人口論』の第 2 版 (1803 年) の中で「食へない餘分の人間は死んだら良い」と述べた次の言葉を想起させる。

A man who is born into a world already possessed, if he cannot get subsistence from his parents, and if the society do not want his labour, has no claim of right to the smallest portion of food, and in fact has no business to be where he is. At Nature's mighty feast there is no vacant cover for him. She tells him to be gone, and will quickly execute her own orders.<sup>5</sup>

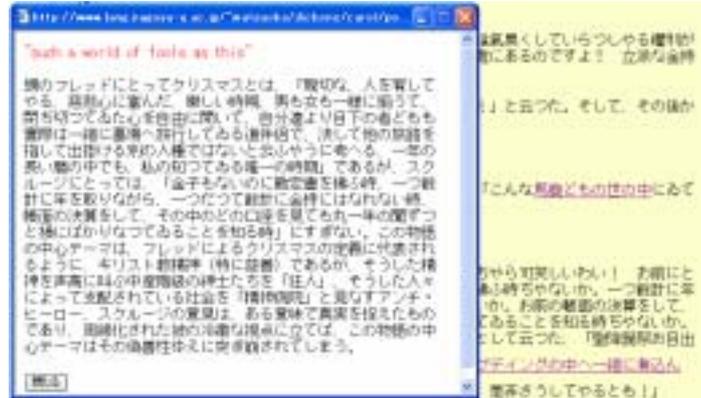
ポップアップしたウィンドウ内に青色表示される上記の英文をクリックすると、米国の Pitzer College にある International Society of Political Psychology のウェブサイト<sup>1</sup>に格納された William Godwin, *Of Population* (London: Longman, 1820) の電子テキスト第 3 章の尾注 e にジャンプする。其處で讀者はマルサスの『人口論』の第 2 版には「食へない餘分の人間は死んだら良い」と云ふ表現があるものゝ、其れは第 5 版で「讀者の感情を不必要に害する事」を避ける爲にマルサスに依つて削除されたと云ふ事實を知らされる。ディケンズがマルサスの『人口論』を正しく理解してゐたか否かは別にして、彼が「過剰な人口」と云ふ麗々しい表現を使つてスクルージの性格をマルサスの貧者觀に基づかせてゐる事、詰まりスクルージの物語『クリスマス・キャロル』と云ふテキストの下の層にマルサスの『人口論』と云ふ別のテキストを隠した事は間違ひない。その他にも、詳細な註釋に様々な歴史と云ふ他者を導入する事に依つて、此のハイパーテキスト版『クリスマス・キャロル』は、タペストリー摸様をした引用の織物となつてゐる。

#### E . 脱中心化 - 基督の慈愛からスクルージの想像力へ

プロットに沿つて活字テキストを直線的に讀むと云ふ行爲は、所謂「木を見て森を見ない」近視眼的な讀みに終始して仕舞ふ危険性を孕んでゐる。リンクを配備したハイパーテキストは多線的な讀みを可能にする（と同時に、原テキストから完全に逸脱して仕舞ふ遠視眼的な讀みに墮する恐れもある）が、周縁から中心を見る複眼を獲得出来る讀者は、其の中心に潜んでゐる様々な矛盾を見出し易くなる。

例へば、貧乏なのに聖降誕祭を祝はふ甥のフレッドに對して腹を立てるスクルージが、「ぷりぷりせず<sup>2</sup>にゐられるかい・・・こんな馬鹿どもの世の中にゐては。聖降誕祭お目出たうだつて！聖降誕祭お目出たうがぢやんぢやら可笑しいわひ！」と言ひ返す場面がある。青色文字の「馬鹿どもの世の中」をクリックすると、次の圖のやうなウィンドウがポップアップする。甥のフレッドにとつて聖降誕祭とは、「深切な、人を宥してやる、慈悲心に富んだ、楽しみ時期、男も女も一様に揃ふて、閉ぢ切つてゐた心を自由に開いて、自分達より目下の者どもゝ實際は一緒に墓場へ旅行してゐる道伴侶で、決して他の旅路を指して出掛ける別の人種ではないと云ふやうに考へる、一年の長い曆の中でも、私の知つてゐる唯一の時期」であるが、スクルージにとつては、「金子もないのに勘定書を拂ふ時、一つ餘計に年を取りながら、一つだつて餘計に金持にはなれない時、帳面の決算をして、其の中の何の口座を見ても丸一年の間ずつと損にばかりなつてゐる事を知る時」に過ぎない。此の物語の中心テーマは、フレッ

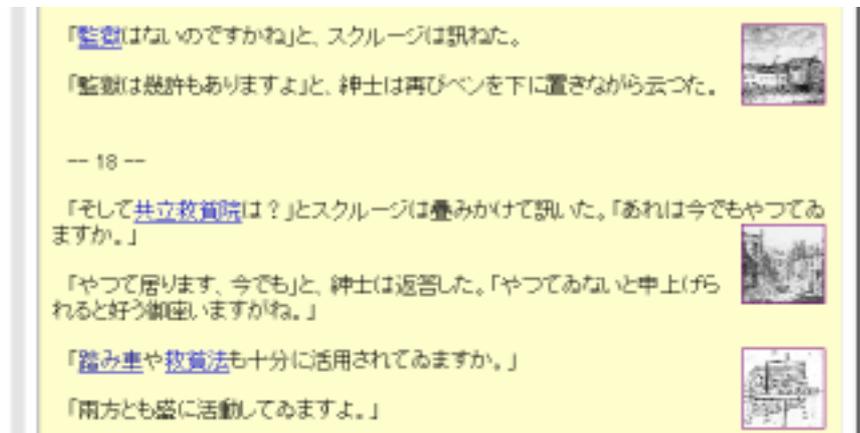
ドに依る聖降誕祭の定義に代表されるやうに、基督教精神（特に慈善）であるが、さうした精神を聲高に叫ぶ中産階級の偽善的な紳士達を「狂人」、斯様な人々に依つて支配されてある社會を「精神病院」と見做すアンチ・ヒーローの意見は、



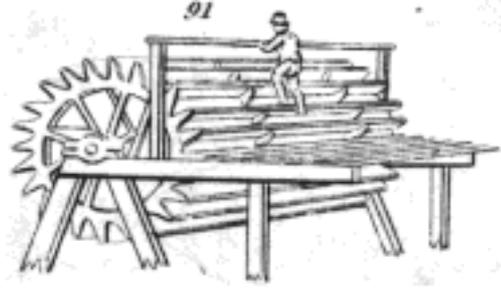
或る意味で プロテスタンティズムの倫理 と 資本主義の精神 が偽善的に結び付けられた当時のヴィクトリア朝社會の實態を見事に捉へたものだと言へる。周縁化されたスクルージの冷徹な視點に立てば、此の物語の中心テーマは其の矛盾ゆゑに突き崩されて仕舞ふのだ。畢竟するに、ハイパーテキスト版『クリスマス・カロール』に嵌め込まれたリンクの一つに依つて、ディケンズが原テキストで訴へた新譯聖書の福音思想に基づく基督教精神と云ふ主題は、主人公スクルージ自身の視點から脱中心化されて仕舞ふのである。

## F．斷片化された畫像ファイル - コラージュとしてのハイパーテキスト

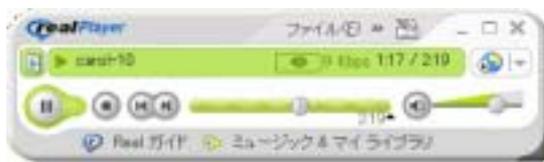
ウェブ上に公開されたハイパーテキストは一般にインターネット元年と言はれる 1995 年頃から畫像ファイルが貼り付けられてゐたが、使用される GIF ファイルにせよ JPG ファイルにせよ、一枚のハイパーテキストに多くの畫像を貼り付けると、全部を表示するのに時間がかゝつてゐた。併し、最近ではハード面の進化とブロードバンドに依つて、さうした問題も殆ど解決した感がある。今回のハイパー・マルチメディア・テキストでは、例へば次の一節のやうに「監獄」、「共立救貧院」、「踏み車」の歴史的解説を一枚のポップアップ・ウィンドウで行なふと同時に、其々の畫像ファイルを縮小した形で嵌め込み、クリックする事に依つて新たなブラウザ畫面で擴大圖を見る



事が出来るやうにした。此のやうに敷き詰められた小さなアイコン状の畫像に依つて、ハイパー・マルチメディア・テキストは *I See All*, 5 vols. (Amalgamated Press) のやうな繪で見る辭典、圖解辭典の役割を果たす。例へば、「踏み車」とは獄舎内で懲罰として踏ませたもので、其れが何かの動力になると云ふ事もない、全く非生産的な活動をさせる道具であつた。併し、其のやうな註釋に加へて、クリックに依つて擴大される右のやうな圖も見せた方が、ハイパーテキストの明示性をより高める事が出来る筈だ。更に、註釋の書き込みと斷片化された畫像ファイルの貼り合はせに依つて、此の種のテキストはマックス・エルンスト (Max Ernst, 1891-1976) の コラージュ 小説『百頭女』(*La femme 100 têtes*, 1929) を電子化したやうな様相を呈するやうになる。



## G . 音聲ファイル - デジタル・レコーディングの非直線性



ハイパーテキストを読む場合の最大の特徴である非直線性は音聲ファイルにも當て嵌まる。其れはデジタル版の特性である。ランダムアクセスが可能なハードディスク上に音聲をデジタル變換・編輯させたファイルには、アナログレコードは無論の事、頭出しが可能なカセットテープにも出来ない瞬間的な前後移動 - 上圖のやうにマウスのポインタでプレーヤーのボタンを操作する事に依る前後移動 - が可能で、分秒の表示を通して好きな箇所を何度でも聴く事が出来る。

ディケンズが『クリスマス・キャロル』で想定してゐた聖降誕祭の頌歌は、或る少年が心付けを期待してスクール

"God bless you, merry gentlemen! Nay nothing you dismay!"

『クリスマス・キャロル』でディケンズの念頭にあったキャロルは "God Rest You Merry, Gentlemen" で、日本では『英美歌集 二編128番『上のひとまゐるな』として知られている。

[Sound 1] [Sound 2] [Sound 3] [Sound 4] [Sound 5] [Sound 6] [Sound 7] [Sound 8] [Sound 9]

英語の歌詞。

God rest you merry, gentlemen,  
Let nothing you dismay,  
Remember Christ our Savior  
Was born on Christmas day,  
To save us all from Satan's pow'r  
When we were gone astray;

(CHORUS)

O tidings of comfort and joy,  
Comfort and joy,  
O tidings of comfort and joy.

Sound 10 (with a singing voice)

和訳

関連サイト

- [History of God Rest Ye Merry Gentlemen](#)
- [www.lstmarketplace.com](#)
- [www.nigelbarny.com](#)
- [www.cobernano.net](#)
- [St. Aubin](#)
- 『クリスマス・ソング Vol.4 狂騒曲』より『メリー・クリスマス・ミスター・ヒーロー』

閉じる

## ージの事務所の鍵穴を通して歌ひかけた

神は貴方達を祝福し給はむ、愉快さうな紳士方よ、 / 貴方達を狼狽せしむる者は一としてなからむ！

と云ふ歌詞で、日本では賛美歌第2編 128番「よのひと忘るな」として、一般に知られてゐる“God Rest You Merry, Gentlemen”である。ハイパー・マルチメディア・テキストでは当該箇所右端に五線譜のアイコンがあり、クリックすれば RealPlayer が起動して此の頌歌が BGM として流れる。又、当該箇所の青色の歌詞には上圖のやうなポップアップ・ウィンドウが仕掛けられてをり、此の頌歌の音聲ファイルが数多くリンクされてゐる。最後のファイル (Sound 10) は歌聲付きで、読者は下の「楽譜」を開いて一緒に英語の頌歌を口遊む事も出来る。



## H . 映像ファイル - 断片化されたビデオクリップ

インターネット元年の十年前には考へられなかつた事であるが、ウェブ上で配信される最近のビデオクリップは殆どテレビと同じマルチメディアとなつてゐる。これは受信されると同時に再生されるストリーミング配信のお陰である。ストリーミングとは、メディアファイルを小さく断片化して転送する事に依り、ファイル全体が転送される迄待たずに、其々の断片を受信と同時に再生出来るやうにする處理の事である。本に譬へるならば、一巻本を受け取つてから読み始めるのではなく、一章毎に受け取つて読み進める事に似てゐる。此の方法は自分が編輯する週間雑誌に自分の小説を連載したディケンズの出版形態と見事に合致してゐる。又、断片化された様々な映像ファイルを鑿めたハイパー・マルチメディア・テキスト版『クリスマス・カロール』は、畫像ファイルの場合と同様にコラージュ小説の趣を呈してゐる。

此處では一例として、帰宅したスクルージの目に、自宅の扉のノッカーが7年前に死んだ共同經營者マーレイ (Jacob Marley) の顔に見えると云ふ 日常の非日常化 現象を見てみたい。以下、断片化した4枚のビデオクリップを連続して見れば、活字テキストだけを直線的に読んでみたのでは思ひ着かない新しい解釋が浮かんで来る。



鍵を差し込まうとする



ノッカーが顔に見える



顔に觸らうとする



ノッカーの顔が消える

ディケンズは作品の冒頭で、スクルージが「<sup>だれ</sup>倫敦市中の何人とも同じやうに、所謂想像力なるものを餘り持つてゐなかつた」と確言して憚らないが、其のやうに讀者の注意を逸らす作者の戦略 (red herring) に惑はされてはならない。此處では、スクルージが功利主義社會を「生き抜く」爲に、本來であれば「息抜き」を與へて呉れる空想を抑壓せざるを得ない、言はゞ 社會の犠牲者 だと云ふ解釋も不可能ではなくなる。スクルージの想像力は、單に記憶の再現や聯想の働きだけでなく、自己を改心させる爲に積極的に獨自の世界を構築してゐる生産的・創造的な點にこそ、其の最大の意義があるのではないだらうか。功利主義的な日常生活で金儲けの爲に想像力を抑壓して來た罪の意識が基督の聖降誕祭前夜に刺戟され、朝晩見慣れてみた扉のノッカーが、ビデオクリップ ~ のやうに一瞬マーレイの顔に見えると云ふ 日常の非日常化、劇作家ヘルベルト・ブレヒトの言葉を借りれば「異化」(Verfremdung) は、彼が想像力を媒體として自分で自分を改心させようとした結果であるやうに思へてならない。卓越した人間の進化論『人間の由來』(The Descent of Man, 1871) の著者で、ディケンズと同時代のダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) が道破し

たやうに、「想像力は人間の最高の特権の一つであり、此の能力に依つて人間は意志から獨立して従來のイメージやアイデアを結合させ、其の成果として新しく素晴らしいものを創造出来る」<sup>8</sup> ののである。

既に多くの研究が爲された古典に新たな解釋を加へるのは、活字テキストだけでは非常に難しい。其れが、畫像、音聲、映像と云ふ人間の目や耳を刺戟するもの、更には人間の臭覺、味覺、觸覺等を刺戟するものに依つても生み出される事は、認知心理學で實證されてゐる。近い將來、さう云ふ人間の五感を刺戟するものをファイル化し、ハイパー・マルチメディア・テキストの中に組み込む事が出来るならば、假令研究し盡くされた感のある『クリスマス・キャロル』と雖も、未だ幾らでも新たな解釋を見出し得るだらう。

## Ⅰ．消費者としての讀者から生産者としての讀者へ

ハイパー・マルチメディア・テキスト版『クリスマス・カロール』は、従來の讀書行爲を變へ得るやうな、讀者をテキストの生産者にし得るやうな、開かれたテキストである。此のテキストの特定の箇所には、讀者が独自の翻譯や解釋を新たな選擇肢として書き加へる事が出来るやうに、擴張機能としてBBS (Bulletin Board System) に依る「フォーム」にリンクが張つてある。BBSとは一人から不特定多數の人に對してメッセージを傳へる情報提供システムで、主として傳言板や討論などに使用されてゐる。

最初に新しい翻譯を書き込む例として、スクリーンがマーレイの幽靈に「お前は誰だね？」と尋ねたのに對し、幽靈が「誰だつたかね？」と尋ね直せと答へた場面を見てみよう。青色表示された『幽靈にしては、いやに八釜しいね。』彼は『瑣細なことまで』と云はふとしたのだが、この方が一層この場に應はしいと思つて取り代へた。」(“You’re particular, for a shade.” He was going to say “to a shade,” but substituted this, as more appropriate.) をクリックすると、次のやうな BBS の掲示板が開く。森田草平に續く歴代の翻譯者の中で有名な5名(角川文庫の安藤一郎、新潮文庫の村岡花子、旺文社文庫の神山妙子、輯英社文庫の中川敏、ちくま文庫の小池滋)の翻譯に、一人の讀者として筆者の個人譯を書き込んでみた。此の一文で重要なのは、ディケンズが考へた “shade” に就いての「幻影、幽靈」と「微かな痕蹟、極く少



量」と云ふ言葉遊びで、其れを如何に翻譯するか肝要となる。安藤譯、村岡譯、神山譯では日本語が言葉遊びになつてゐない。中川譯の「幽霊」と「れいれいしく」は音韻的には良いが、意味的には問題を残してゐる。小池譯の「ものゝけのくせに」と「ものゝけぢめを」も音韻的には秀逸であるが、原意の「ほんの少し (to a shade)」から逸脱してゐる。「精霊」に「せいれい」と「しょうりよう」の読み方がある事に着目した筆者の譯も、「少量だけど口喧しい」と云ふ表現は、日本語として些か奇異かも知れない。他に、



「英霊の割りにえれえ口喧しい」等も考へられるが、ディケンズの作品に多く見られる言葉遊びを短い適切な日本語に譯するのは非常に難しいので、大抵の場合は註釋を付けて説明するしか方途がない。其の意味で、ポップアップ・ウィンドウ形式の註釋は、言葉遊びの面白さを明示するのに十分な威力を發揮する。

次に讀者が新しい解釋を書き込む事でテキストの生産者になる例として、別のBBSの掲示板を見てみよう。黄緑表示された「スクルージの事務所の戸は、大桶のやうな、向ふの陰氣な小部屋で、澤山の手紙を寫してゐる書記を見張るために開け放しになつてゐた」(The door of Scrooge's counting-house was open that he might keep his eyes upon his clerk. . . .) と云ふ文章は、クリックする事で「ディケンズと狂氣」の問題について開設した掲示板が別のブラウザ画面として立ち上がる。此の掲示板では、Mr. Dick と云ふハンドルネームの讀者が、「階層秩序的な監視」と云ふ主題で以下のやうな書き込みをしてゐる。

フーコーは近代社會を管理の眼差しの作用に依つて強制を加へる「階層秩序的な監視」“hierarchical observation”の社會として捉へた。雇ひ主スクルージが事

務員ボブ・クラチットの労働を監視する爲に、仕切りの扉を開け放つた倫敦の事務所は、其のやうなテーゼを具現する小空間だと言へる。安月給で子澤山にも拘はらず聖降誕祭の挨拶をするクラチットに向かつて、スクルージは「精神病院に引き籠もりたいぞ」と呟いてゐる。此のやうに、狂氣の問題は誰が誰を狂氣と見做すのかと云ふ視點、そして權力の問題と常に關はつて來る。階層秩序的に言へば、理性と同一視される支配者の言説や秩序を支へるイデオロギーが、抑壓や排除と云ふ形で被支配者を狂氣に驅り立てるのである。

斯様な嚆矢が放たれれば、「ディケンズと狂氣」に關心のある讀者は - 如何にして此のハイパーテキストの存在を周知徹底させ、多くの讀者を書き込む氣にさせるかと云ふ問題は扱置き - 最初の書き込みを敷衍したり、自分独自の意見を披瀝する事が出来る。例へば、上の書き込みに對して、

アンブローズ・ピアスは『惡魔の辭典』(1906)の中で、「或る人々をキ印だと宣告するのが、自分自身正氣である證據が何一つない役人であると云ふ事は注目に値する」と言つた。役人を始め權力を握る支配者は、自分の價值觀から逸脱する事に對して「狂つてゐる」と思ふ譯だが、其れは自分が理解出来ないと云ふ劣等性を狂氣と云ふ形で相手に投影し、其れを外的な事として認知する、言はゞ自我安定の爲の無意識的戰略に他ならない。ディケンズが狂氣を描く時、何時も問題となるのは、此のやうに狂氣と見做す權力の背後に潛む狂氣である。

のやうな書き込みをし、増殖する織物としてのハイパー・マルチメディア・テキストに「一針の糸」(stitch)を入れる事で、單なるテキストの受動的な讀者から脱する事が可能となる。いづれにせよ、此のやうに讀者は自分の翻譯や解釋を新たに書き込む事に依つて、ハイパー・マルチメディア・テキストの製作自體に参加し、其のテキスト内で多方向に翻譯や解釋のシーケンスを作る事で、他の讀者に翻譯や解釋の選擇肢を與へる事になるのだ。

バルトやフーコーが記述してゐるやうな、開かれたインタラクティブな多數の網目からなる讀みの回路を持つテキストは、ネットワークを舞臺とするウェブ上でこそ最も理想的に構築出来る。今回試作したハイパー・マルチメディア・テキストの一番ユニークな點は、傳統的な讀書習慣から離れてウェブの迷路に入つた讀者が、枝分かれした多くの電子リンクを自由な選擇に依つて辿るだけでなく、自らが新たな翻譯や解釋を書き加へる事でテキストの生産者になる事が出来る所にある。其處では独自のサブウェブが構成され、讀者の讀む行爲と讀まれるテキストの性質自體までが根底から變化して仕舞ふのである。

## 注

- 1 “Among the many reasons which make me glad to have been born in England, one of the first is that I read Shakespeare in my mother tongue. If I try to imagine myself as one [ . . . ] who hears him only speaking from afar, and that in accents which only through the labouring intelligence can touch the living soul, there comes upon me a sense of chill discouragement, of dreary deprivation.” George Gissing, *The Private Papers of Henry Ryecroft*, “Summer” 27, *The World’s Classics* ed. (1903; Oxford: Oxford UP, 1987) 96.
- 2 夏目漱石『吾輩は猫である』(1961; 新潮文庫, 1974) 492.
  - 一、口語文の作品は、舊假名遣ひで書かれてゐるものは現代假名遣ひに改める。
  - 二、文語文の作品は舊假名遣ひの儘とする。
  - 三、一般には當用漢字以外の漢字も使用し、音訓表以外の音訓も使用する。
  - 四、難讀と思はれる漢字には振假名を付ける。
  - 五、送り假名は成る可く原文を重んじて、妄りに送らない。
  - 六、極端な宛て字と思はれるもの及び代名詞、副詞、接續詞等のうち、假名にしても原文を損う恐れが少ないと思はれるものを假名に改める。(此れは文語文にも適用する)
- 3 尾崎紅葉『金色夜叉』, 森敦譯, 『明治の古典(全10巻)』第2巻, 學研, 13.
- 4 戦後の占領下、日本の傳統を排斥する機運が醸成される中で、漢字を全廢する迄の處置として當用漢字(1,850字)が内閣告示された。一方、歴史的假名遣ひに就いては、福田恆存が雑誌『聲』(1958)に聯載した『私の國語教室』で、發音が變化したから表記法も變へる可きだと云ふのは間違ひだと指摘し、言葉の起源に忠實な語に随つた表記法を用ゐる歴史的假名遣ひの論理的一貫性を主張した。音韻は此れ迄も常に變化して來たし、未來社會に於いても當然變化して行く事が豫想される。其の都度發音に合はせて表記を變へるのは、其れこそ政府の場当たりの政策と何ら變はりがない。現代假名遣ひの不合理性と歴史的假名遣ひの正當性や合理性に關しては、福田恆存『私の國語教室』(文春文庫, 2002) 16-99を参照。
- 5 効率性だけを求めた教育の弊害は、英吉利では既に150年前にヴィクトリア朝のディケンズに依つて、當時の功利主義を攻撃した『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)の中で糺弾されてゐる。ディケンズは、効率性が求められた産業革命後の時代に於いて、個性を無視した畫一主義の社會全體への擴大を感じ取つてゐた。例へば、物事を事實其の儘の姿でしか見ようとしなない自稱セルフメイド・マンの工場主バウンダビー(Josiah Bounderby)は、空想の世界を具現するサーカス團と對置される。そして、サーカス團員の中だけで通じる隱語(jargon)が空想の産物と云ふ理由で、彼等は奇妙な聯中として周縁化され、其の言語は其の理解不

能性ゆゑに抑壓の対象となる。事実や数字は把握して管理出来るが、空想や想像力は其の自由な活動性ゆゑに制御出来ないからである。

6 Thomas R. Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, ed. Donald Winch (Cambridge, UK: Cambridge UP, 1992) 249.

7 當用漢字に依る使用漢字の制限の弊害は、新聞・雑誌等では「ら致」「脱きゆう」「補てん」「信ぴよう性」のやうな不恰好な交ぜ書きに端的に現はれてゐる。又、小學 2 年の國語教科書では、例へば「かん字」のやうに半分漢字、半分假名で書いてゐる。「芽」は 4 年生で習ふ漢字だからと云ふ理由で、3 年生に「麥が發がする」と書かせて、何の意味があるのだらうか。「麥が發<sup>が</sup>芽する」と云ふやうに、全て漢字で表記して振り假名を付けないのは何故か。確かに文章に振り假名が多いと見苦しいが、交ぜ書きも見苦しい(更には讀みにくい)のだ。同じ見苦しきであれば、少しでも多くの漢字を自然と覺える方が良いではないか。正字や難しい漢字が入つた戦前の翻譯書を忠實に HTML 文書化する上で最大の牆壁となつてゐたのが振り假名(ルビ)である。HTML 4.01 以前ではルビが使へなかつたが、最近では文書中の振り假名に特別なマークアップを施す事で、Internet Explorer Ver. 5 以降のブラウザにルビが表示されるやうになつた。又、正字や難しい漢字にルビを手輕に打つ爲の HTML タグ生成のフリーソフトも配賦されてゐる。

8 Charles Darwin, *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*, 2 vols. (London: John Murray, 1871) 1: 45.

9 J. David Bolter, *Writing Space* (Hilldale, NJ: Lawrence Erlbaum, 1990) 143.

10 George P. Landow, *Hypertext: The Convergence of Contemporary Critical Theory and Technology* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1992) 3.